

## 「少年がみた大人の世界」

松沢 友紀

僕は幼い頃から釣りが大好きで、週末になると川や湖に出かけて行っては、コイやナマズを釣っていた。ただ釣るだけではなくて、その魚を自宅や学校の水槽で飼っていたりしていたものだから、学校の中ではちょっと変わった奴だと有名だったらしい。

夏休みが近くなったある日、理科の教諭に呼び出された。

「水質検査の研修に行ってみないか。魚のことをよく知るには水のことを分かっていた方がいい。釣りにも何かの役にたつだろうし、お前にちょうど良いだろうと思ってな」

どこかの自治体だか企業だかがお金を出して子どもたちに研修をさせてくれる制度があって、その枠が空いていて話が回ってきた、確かそんな事だったと思う。水質検査が釣りに役立つとはとても思えなかったが、強引に説得され、その研修に参加することになった。

都心から電車で30分ほどの駅で降り、郊外の住宅地の中をしばらく歩いた場所に、環境分析会社の分析室はひっそりとあった。その夏は特別に暑い夏で、日差しの中を歩いて来た僕が狭い入り口から中に入ると、最初室内は暗くてよく見えなかった。しばらくして目が慣れてくると、そこには見た事のない別世界があった。

薄暗がりから浮かび上がってきたのは、奇妙な造形のガラス機器の数々。釣り少年には、その用途が想像できないものばかりだった。近寄ってまじまじと覗いてみると、それらのガラスには一点の曇りもなく限りなく透明で、ビーカーの様な見慣れたものでさえ、背筋を伸ばしているように思われた。それらが整然と、あるものは棚に、またあるものは壁にかけられ、静かに並んで自分の出番を待っている。そこには、学校の理科室とは明らかに違う、子供を寄せ付けない威厳に満ちた大人の世界があった。僕は一瞬にして、この空間が好きになった。

Yさんはいかにもこの道一筋という感じの技術者で、口数は多い方ではなかったが、必要なことを必要な量の言葉で説明してくれる人だった。何故そうするのか、何故そうしてはいけないのか、中学生を相手に話すのには気苦労もあっただろうに、少し込み入った事についても丁寧に教えてくれた。

Yさんが計量機器と対峙する姿には、熟練した技術者だけがまとう機能美ともいべき独特の雰囲気があった。ビューレットのコックをひねる指先や、ビーカーを持ち上げて発色を確かめるときの斜めの視線は、これがプロの世界なのだよと寡黙に語りかける力があって、少年は素直に憧憬の念を抱いた。彼がこの分析室の中でどれくらい偉い立場なのかは最後まで分からなかったが、誰もが彼に敬意を持って接していたから、やはりすごい人だったのだろう。

僕はここでYさんから、機器の扱いだけでなく、洗い方、薬剤の混ぜ方、検量線の作

り方を教わり、DO、COD、BOD、SS、それから硝酸、亜硝酸、リン酸などの測定を教わった。「共洗い」や「前処理」といった言葉を覚えたのもこの分析室だった。滴定の時の最後の一滴、否、半滴を入れる時の緊張感、青やピンク、黄色の発色。指先に触れた硫酸の衝撃。研修の二週間はあっという間に過ぎていった。

夏休みが終わったころには、僕はすっかり水質の分析に夢中になっていて、早速、例の理科の先生に掛け合って、機器を使わせてもらい、友人と一緒に学校の裏にある川や雨水を集めては、片っ端から測っていった。熱意に押されたのか、きっかけを作った責任を取るつもりだったのか、次第に機材も増えていった。吸光光度計を使いこなす中学生なんて当時は多くなかったはずだ。数ヶ月後、僕らのまとめた研究レポートには、裏の川の亜硝酸態窒素濃度が雨の二日後に必ず上昇することや、ホテルが住むのに十分な水質であることが書いてあって、レポートを受け取った理科の教諭は随分満足げな表情をしていた。

その後、大学・大学院で生物学を専攻し、環境系コンサルに就職した僕は、いまでは直接、機器分析に携わることはなくなったけれども、あの夏の出来事は今でも鮮烈に記憶に残っているし、僕自身のその後の生き方に何らかの大きな影響を与えているに違いない。

大人になった僕が通う今の実験室は、階段を下った地下にある行きつけのバーだ。重い扉の向こう側にあるわずか数席のカウンターからは、よく磨かれたガラスが整然と並んでいるのが見える。四角いものや丸いもの、細いもの太いもの、形も大きさもまちまちだ。さすがに用途の分からないものは無いが、色鮮やかな液体がいろいろと並んでいるのもあの分析室と似ていなくもない。

グラスの中の琥珀色の液体を見つめる斜めの視線は、どこかで Y さんを意識している。彼は僕の中でダンディズムの原型になっているのかもしれない。そんな僕もあの時の Y さんと肩を並べて見劣りしない歳になった。誰かの目標になるに相応しい本物の大人を目指して、曇りない透明な眼を持ったまま生きていきたい。